

松 山 大 学 論 集
第 34 卷 第 5 号 抜 刷
2 0 2 2 年 12 月 発 行

四国はどう表象されているか
—— 漫画『ドカベン』にみる地域ステレオタイプ ——

市 川 虎 彦

四国はどう表象されているか

—— 漫画『ドカベン』にみる地域ステレオタイプ ——

市 川 虎 彦

1 問 題 設 定

人は、ある地域に対して固定的な印象を抱く場合がある。例えば、「美食の国フランス」「音楽の都ウィーン」「古都京都」というように。これらの像は、テレビや旅行情報書などで反復して用いられることによって、世代を超えて受け継がれていく。それでは四国は、日本の中でどのような地域とされているのであろうか。

こうした問いに対して、質問紙を用いた社会心理学的な研究が行われている。今榮国晴は大学生を対象に意味微分法を用いて、北海道・東北・関東・中部・近畿・中国・四国・九州のイメージを測定している¹⁾。意味微分法とは、ある事象に対して「美しい-汚い」「さびしい-にぎやかな」「古い-新しい」といった対になる形容語でつくられた尺度のどこに位置づくか、被験者に評定してもらう方法である。

このような客観的な手法では掬い取れない像もあると考えられる。冒頭の例でいえば、意味微分法で「古都」(=古い)というイメージは判定できても、「美食」は零れ落ちてしまう。そこで大衆文化の中に期せずして表現されてしまう地域イメージを分析することによって、客観的な評定ではわからない地域像をあきらかにすることができるのではないかと考えた。

例えば、石森章太郎のSF漫画に『サイボーグ009』という人気作品がある。『サイボーグ009』は、世界各地で瀕死の状態になった人間をサイボーグ化し

て蘇らせ、再生した001から009までの9人のサイボーグ戦士が悪の組織・ブラック・ゴーストなどと闘うという物語である。金水敏は、「設定として面白いのは、一〇人²⁾の国籍がばらばらであり、日本人読者の人種・国籍ステレオタイプがうまく利用されているという点である」（金水敏『コレモ日本語アルカ？』P.152～153）と述べている。例を示せば、003のフランソワーズは元バレリーナの若いフランス人女性（もちろん美形）で、美と芸術の国＝フランスという、日本人がもつフランスに対するステレオタイプが反映させられている。006の張々湖は元中華の料理人（小太り・泥鰌ひげ）でといったぐあいである。

ステレオタイプとは、上瀬由美子によれば「ある集団の人々に対し、多くの人が共通したイメージをもっていることがあります。このような、人々を分けるカテゴリーに結びつき、そのカテゴリーに含まれる人が共通してもっていると信じられている特徴のことを『ステレオタイプ (stereotype)』といっています」（上瀬由美子『ステレオタイプの社会心理学』P.2）とされている。

少年漫画は対象とする読者の年齢層が低いので、受け入れやすいように意識的、無意識的にステレオタイプが活用される。『サイボーグ009』には、「人種・国籍ステレオタイプ」がつかわれているのだけれども、それでは日本の各地方に関するステレオタイプが描き出される漫画はないだろうか。考えてみると、ここに分析の素材となる格好の漫画がある。それは、1970～80年代に人気を博した野球漫画『ドカベン』である。次節で『ドカベン』がいかなる漫画か、なぜ地域のイメージやステレオタイプを分析する素材として適しているかを示す。その上で、3節から5節にかけて『ドカベン』の中に現れた地域のステレオタイプの事例を具体的にあげていくことにする。そして第6節で、四国が『ドカベン』の中でいかに表象されているか、またなにゆえそのような表象が生まれたのかを論じていくことにする。なお、通常、漫画の吹き出しの中の台詞には句読点がない。しかし、引用の際は、読みやすいように、こちらで適宜句読点を補っている。

2 野球漫画『ドカベン』～ステレオタイプの発露

水島新司によって描かれた『ドカベン』は、1972年から81年まで『週刊少年チャンピオン』に連載され、その続編となる『大甲子園』が1983年から87年まで同誌に連載された³⁾。漫画家のきたがわ翔は、「僕たち一九六〇年代生まれの世代が大いにハマったスポーツ漫画が存在します。アニメ化や実写映画化はもちろん、テレビゲーム化もされた野球漫画の金字塔、水島新司先生の『ドカベン』です」(きたがわ翔『プロが語る胸アツ「神」漫画』P.14)と述べている。漫画評論家の米沢嘉博は、「おおよそ七四～八〇年頃、水島野球マンガは少年マンガ誌を席巻し、野球マンガブームを作り出していくことになるのだが、その中心にあったのは『ドカベン』だった」(米沢嘉博『戦後野球マンガ史』P.142)と評している。このように、『ドカベン』は最も世に受け入れられた野球漫画だとの評価が定まっている。きたがわ翔が言うように、1960年代生まれの人は、いわゆる「明訓四天王」と表現される山田太郎・岩鬼正美・殿馬一人・里中智ほか、主要登場人物の顔がすぐに思い浮かぶ人が多いことであろう。

『ドカベン』は、当初、中学を舞台にした柔道漫画として出発した。その後、中学野球を経て高校野球漫画となる。本格的に人気を得るのは、高校野球を舞台としてからである。『ドカベン』本編では、四天王の1年生から3年春の選抜大会までが描かれる。『大甲子園』は、四天王3年の最後の夏が描き出される。また『大甲子園』は、『一球さん』(巨人学園)・『ダントツ』(光高校)・『男どアホウ甲子園』(南波高校)・『球道くん』(青田高校)という水島新司作の他の高校野球漫画の主人公たちとそのチームが全国選手権大会で、一堂に会して対戦するという趣向にもなっている。

『ドカベン』は、主人公の山田太郎が進学したタレント集団の明訓高校に対して、それぞれの特徴を備えた個性ゆたかなチームが挑み、様々な試合が繰り広げられる。表1に示したとおり、関東大会・全国大会となると、全国各地の

表1 明訓高校の神奈川県外の高校との対戦成績

大会		対戦相手	都道府県	勝敗	対戦成績	備考
全国選手権	1回戦	通天閣	大阪	○	3-1	延長10回
	2回戦	梅が丘	広島	○	1-0	
	準決勝	土佐丸	高知	○	5-4	延長10回
	決勝	いわき東	福島	○	2-1	
秋季関東大会	1回戦	甲府学院	山梨	○	3-2	
	準決勝	クリーンハイスクール	千葉	○	6-5	延長13回
	決勝	赤城山	群馬	○	2-1	
選抜大会	1回戦	桜島大商	鹿児島	○	3-0	
	2回戦	鳥取大砂丘学院	鳥取	○	7-5	
	準々決勝	江川学院	栃木	○	2-1	延長12回
	準決勝	信濃川	新潟	○	3-2	
	決勝	土佐丸	高知	○	6-5	延長12回
全国選手権	1回戦	B T学園	東京都	○	6-5	
	2回戦	弁慶	岩手	●	2-3	
秋季関東大会	1回戦	中山畜産	千葉	○	4-3	
	2回戦	大熊谷工業	埼玉	○	10-0	4回コールド
	準決勝	日光学園	栃木	○	11-0	1回コールド
	決勝	下尾	埼玉	○	6-2	
選抜大会	1回戦	通天閣	大阪	○	2-0	
	2回戦	花巻	岩手	○	3-1	
	準々決勝	土佐丸	高知	○	1-0	
	準決勝	石垣島	沖縄	○	1-0	
	決勝	北海大三	北海道	○	4-3	
全国選手権	1回戦	室戸学習塾	高知	○	4-2	
	2回戦	りんご園農業	青森	○	9-5	
	3回戦	巨人学園	東京都	○	1-0	
	準々決勝	光	西東京	○	4-1	
	準決勝	青田	千葉	△	4-4	延長18回引分
		青田	千葉	○	2-1	再試合
	決勝	紫義塾	京都	○	4-3	

チームと神奈川県代表の明訓高校が対戦するようになる。その中で、県外チームの個性に、地域の個性が重ね合わせられて描かれる事例が見れる。そこに、地域に関するステレオタイプが浮かび上がるのである。『ドカベン』のように人々に広く受容された漫画は、地域の表象を分析する素材として最適といえるだろう。

ただし、『ドカベン』『大甲子園』の連載時期は既述のとおり1970～80年代である。半世紀近く前の作品で、素材として古いという考えもあるかもしれない。しかし、変化しにくいという特性がステレオタイプのステレオタイプたるゆえんであり、分析の対象として問題はないと考える。

3 ブロック別に見た対戦相手

明訓高校は神奈川県にあるという設定である。『ドカベン』で描かれる試合は、神奈川県大会、関東大会、全国大会の3つである。そこで、明訓高校の神奈川県外への対戦校を高校野球の地区大会の区割りにしたがって分類してみたのが、表2である。

秋季関東大会があるため、登場する高校の数は9校、描かれる試合の数は

表2 明訓高校の地域別対戦数

	都道府県数	校数	試合数
北海道	1	1	1
東北	3	4	4
関東	5	9	10
東京	1	3	3
東海	0	0	0
北信越	1	1	1
近畿	2	2	3
中国	2	2	2
四国	1	2	4
九州	2	2	2

10 試合（再試合の1 試合を含む）と最も多いのが、関東地方である。しかし、地域性を強調した描写がある高校は、ほとんどない。校名をみても、クリーンハイスクールというまったく地域性のない校名のほか、甲府・熊谷・日光・下尾（上尾）⁴⁾ というごく普通の地名を冠した高校である。中山畜産（千葉）の中山は、中山競馬場からの借用であろうか。江川学院だけは人名からとられていて、甲子園の元祖「怪物」江川卓（作新学院〔栃木〕－法政大学－読売）の「江川」である。また、試合の中でも、これらの高校に何か地域を象徴するものがかぶせられることはない。ふつうに試合の描写が進められている。

なぜ関東地方の高校には、地域性をともなう象徴やイメージが表現されないのであろうか。これは、関東各県の印象が薄いということと関係があると思われる。祖父江孝男の『県民性』（中公新書）は、県民性を論じる際に必ず引き合いに出される名著である。しかし、副題に「文化人類学的考察」とついてはいるけれども、各県民の社会的性格について、それほど科学的・統計的な分析がなされた内容ではない。むしろ、各都道府県の事情に通じた知識人の印象批評といった面が強く、それでかえって各県のステレオタイプが示されているといえる著作である。その祖父江孝男『県民性』をみると、「栃木に眼を移せば、これまたなんとなく特色がなくてくすんでいる点では、茨城に勝るとも劣らない」（祖父江孝男『県民性』P. 102～103）と評され、「埼玉となると、どうも掴みどころがない」（同書P. 115）であり、千葉県は「小藩であったため、それぞれの地域に強烈な伝統が育たず、したがって県民性といわれ得るとき特色が育たなかったという点は、埼玉の場合と類似している」（同書P. 117）となる。栃木、埼玉、千葉、いずれも特色が薄い県とされているのである。

そうした中で唯一、地域性が刻印されている高校が、群馬県の赤城山高校である。高校名には新国劇の名台詞で有名な「赤城山」、エースで4 番の選手は「国定忠治」である。印象が薄い関東各県の中で、群馬県だけは明瞭な印象がもたれている。祖父江によれば、「茨城、栃木と、いささか特徴のはっきりしない県がつづいたが、すぐその隣にありながら、上州すなわち群馬になると、

こんどはだいたいお趣がかわって、そのイメージはきわめて強烈だ。群馬に行ったことのない人でも、『上州名物、カカア天下にカラッ風』ということばだけならよく知っている」（祖父江孝男『県民性』P.103）となり、「権力への反骨精神と、気前のよさとが組み合わさってできたもう一つの上州名物は、『やくざ』の存在だ」（同書P.106）とされる。「上州やくざ」のステレオタイプが、赤城山高校の造型に取り入れられているのである。

ちなみに明訓高校がある神奈川県の県民性は、祖父江孝男『県民性』のなかで「さて神奈川の県民性となると、これまた特徴がなくて捉えにくい」以下、4行で片付けられている（祖父江孝男『県民性』P.119）。

関東以外の県に目を向けてみると、どうであろうか。現実の高校野球の都道府県別の成績をみてみると、勝率1位は大阪府で、2位が神奈川県である。高校野球界では、東の横浜・西のPLが東西の両横綱と目される時代が長く続いた。都道府県別でみても、この両府県がすばらしい成績を残している。『ドカベン』でも「神奈川県を制するものは全国を制す」という言葉で、山田太郎最初の夏の神奈川県予選が描かれ始める。勝率4位には、中京大中京・東邦・愛工大名電、享栄など、強豪校がひしめく愛知県が来る。6位に広島商業・広陵といった強い伝統校が存在する広島県が入っている。

明訓高校が勝ち進んでいくと、愛知、広島、兵庫（勝率7位）、和歌山（勝率9位）といった高校野球強豪県の代表校と対戦すると、漫画に現実感が出る。しかし、必ずしもそうになっていない。愛知を含む東海地区の高校は一度の対戦もなく、広島は梅が丘が一度当たっているけれども、試合の描写は10ページ程度の幕間劇である。「梅が丘」という名前からして没个性的であるし、広島を象徴するものは何も描かれていない。梅が丘高校が、どの県の高校であってもかまわないような描かれ方をしている。なお、祖父江孝男は広島県について「同じ中国地方でも広島になると、ややイメージがぼけてくる」（祖父江孝男『県民性』P.183）と書き記している。

高校野球において水準の高い東海地区や広島県が、なぜ『ドカベン』には登

表3 高校野球春夏全国大会の都道府県別戦績上位17県
(2022年選抜大会まで)

順位	都道府県	勝利	敗戦	勝率	勝率順位
1	大阪	389	227	.631	1
2	兵庫	315	245	.563	7
3	東京	312	263	.543	15
4	愛知	304	203	.600	4
5	和歌山	234	187	.556	9
6	広島	212	152	.582	6
7	神奈川	209	128	.620	2
8	京都	206	181	.532	16
9	高知	189	125	.602	3
10	愛媛	188	127	.597	5
11	福岡	154	170	.475	24
12	奈良	147	123	.544	13
13	静岡	143	153	.483	21
14	岐阜	142	114	.555	10
14	千葉	142	116	.550	11
16	徳島	139	109	.560	8
17	香川	130	130	.500	18

<http://highschoolsports.g1.xrea.com/kiroku25.html> より作成

場してこないのか、あるいは重要な役割を担わなかったのか。たとえば、明訓高校が全国大会初出場を決めた直後のミーティングの場面では、徳川家康監督が「広島に高知に兵庫……。へえ～優勝候補とおぼしき代表の決勝戦の時の新聞だ」と述べ、山田の祖父が集めた各県の新聞に目を通すように部員に指示している。ここでは、広島・高知・兵庫という高校野球強豪県の名が「優勝候補」として出てきている。逆に『大甲子園』に登場する青森代表・りんご園農業については、岩鬼が「おそるに足るかい、青森代表やで」と侮った言葉を口にし、同校を取材した記者が「勝利者インタビューしかせえへんとは、青森にしちゃ、えらい自信や」との感想を漏らしたりしている。これらの言葉は、青森が野球

弱小県だということが前提になっている。作者の水島新司は、むろん野球通である。現実の高校野球で、どの県が強くて、どの県が弱いのか、よく知っていたのである。

にもかかわらず、愛知や広島の高校が『ドカベン』の中で活躍することがなかったのは、なぜなのだろうか。それは、この地域のイメージが明瞭ではないからだと考えられる。第1節で紹介した今栄国晴の研究をみると、中部地方は「この地方は人々から特色のある強い印象をもたれない平凡な地方と言えよう」（今栄国晴「地方イメージにおける近畿圏の特徴」P.284）とされている。また、中国地方は「中部と同じくすべてにおいて中程度で印象が平凡である」（同上）と述べられている。中部、中国ともに強いイメージをもたない地域と結論づけられている。明訓高校の対戦校にふさわしい特異な性格を付与しにくい地方であったといえる。

野球漫画のもう1つの代表作に梶原一騎原作・川崎のぼる画の『巨人の星』がある。主人公の星飛雄馬は、高校1年生の夏、東京の青雲高校のエースとして甲子園の土を踏み、準優勝に輝く。星飛雄馬は、この後、暴力事件に巻き込まれ、高校を中退するので、甲子園出場はこの一度だけである。この大会で試合経過が描かれるのは3試合である。1回戦の尾張高校戦、準決勝の左門豊作擁する熊本農林戦、そして決勝戦の花形満率いる紅洋高校（神奈川代表）戦である。1回戦の中京代表・尾張高校は前年度優勝校ということで、『巨人の星』は現実の高校野球強豪県を反映させた設定になっている。現実感が湧く描き方である。

ちなみに、プロ入りしてからも好敵手となる左門豊作が熊本の高校なのは、連載当時の読売監督・川上哲治と同郷という設定のためである。左門は、甲子園へ出発する前に「阿蘇山よ、活火山としてのスケールの雄大さでは世界一といわれる、燃えさかり、いかりくるう火の山よ！」「いまこそわしも大噴火するたい！ 天下の甲子園で」と吠える。このように熊本を象徴するものが全く現れないわけではない。しかし、左門に付与されるのは、圧倒的に農村地帯一

般のイメージである。貧困、重労働と労働力としての子ども、子だくさん、家族（兄弟）の結束、農民たちの教育への無理解等々。高度経済成長から取り残され、因習に縛られた遅れた農村地帯が、左門の故郷である。また、「宿命のライバル」花形満が均整のとれた体つきで、整った風貌に描かれ、髪型も長髪で、いかにも都会的であるのに対し、左門はずんぐりした体形で、丸い顔に小さな目で眼鏡をかけ、髪の毛は丸刈りに造型されている。いかにも野暮ったく、田舎風の印象を与える描写となっている。野球は、左門が貧困と農村から脱出するための手段である。

話を『ドカベン』に戻したい。『ドカベン』で明訓が現実の野球強豪県と必ずしも対戦するわけではないのは、現実感よりもチームの造型、話の展開の面白さを優先させて追求したためだと思われる。その結果、チームに個性を出しやすい、明瞭な地域イメージやステレオタイプをもった県の代表校が対戦相手として選ばれがちになったといえよう。あるいは逆に、地域の個性が強く認知されている県に対戦相手が割り振られたと考えられるのである。その代わりに、現実の都道府県の高校野球勢力図とはかなり異なった全国大会の展開になってしまったと言えるのではないだろうか。では、関東・中部・中国と異なって、個性的な地域とはどこなのだろうか。また、その個性はチームの造型にどう取り入れられているのであろうか。次にみていきたい。

4 東北と近畿～明瞭なイメージをもつ地域

『ドカベン』では、東北地方の高校の登場回数が4校と多い。単に多いだけでなく、明訓高校最初の夏の甲子園決勝の相手は、福島県のいわき東であり、明訓高校唯一の敗戦は岩手県の弁慶高校によってなされたものである。東北の高校は、きわめて重要な役割を演じているのである。他にもりんご園農業戦は、序盤に5点差をつけられて大苦戦する。花巻高校は明訓の大平監督の実子・太平洋がエースで4番を務める。試合は、9回表まで花巻高がリードし、9回裏に山田太郎の逆転サヨナラスリーランホームランで決着がつくという際どいも

のであった。花巻高は、春夏連続出場を果たし、明訓と対戦することはなかったものの、夏はベスト4に駒を進めている。

21世紀になってから、高校野球の都道府県間の実力の地域差が縮小してきている。東北地方の高校でも、八戸学院光星（青森）、花巻東（岩手）、東北（宮城）、仙台育英（宮城）と、甲子園で常時活躍する強豪校が存在するようになった。旋風を巻き起こした金足農業（秋田）の2018年夏準優勝も記憶に新しい。そして2022年夏の選手権大会では、仙台育英が東北勢として初めての甲子園大会制覇を成し遂げている。球界を代表する選手も、東北地方の高校から続々と誕生している。しかし、『ドカベン』連載時の1970年代は、気候の問題もあり、東北は高校野球の弱い地域であった。そのため、『ドカベン』世界と現実との隔たりを感じた人もいたのではないだろうか。では、なにゆえ『ドカベン』において、東北地方の高校が明訓を苦しめる強豪校として描かれたのであろうか。

前出の今栄国晴の意味微分法調査によれば、東北地方は東京を含む関東地方と対極的なイメージをもたれているという。すなわち、東北は「最も後進的、非都会的、非合理的であるという印象が人々に強いことを示す」（今栄国晴「地方イメージにおける近畿圏の特徴」P.284）というのである。つまり、東北はイメージのはっきりとした地域であり、しかも東京・神奈川のような都会と対極的なイメージの地域なのである。ゆえに、個性的なチームを造型するのに適した地方だったと考えられるのである。

いわき東のエース緒方勉は、夏の全国大会直前に神奈川県へ「出かせぎのおとうが倒れたで、リリーフに来たべや」⁹⁾と山田兄妹の前に現れる。そこで、「出かせぎくん」なる仇名をつけられる。1970年代には、まだまだ東北といえは「貧困」「出かせぎ」というイメージが残っており、それが反映されている。1971年刊行の祖父江孝男『県民性』にも、「それは最近、マスコミでもさかんにとりあげられている出稼ぎの問題だ。いわゆる離村という現象は全国的に起こっているが、西日本ではむしろ、いわゆる挙家離村の型が多い。これに対し

て離家離村（出稼ぎ）の形をとるのは、圧倒的に東北に多く、ことに山形と秋田とがトップを切り、ついで青森、岩手、福島がつづいているといわれる」（同書 P. 98）との記述が現れるくらいである。

さらに、いわき東ナインの背後に、いわきの経済を支えてきた炭鉱の廃鉱が差し迫って来ていることが示される。緒方は、母親から「えっ、やっぱり廃鉱ときまったの」「和田さんも、佐久間さんも、ほとんどの人が甲子園大会が終わったら引っ越すそうですよ」と聞き、野球部の仲間と「おれたちが野球できるくらいまで大きくしてくれたのは、この炭鉱だ」「いわき魂を甲子園大会で見せてやろうぜ」「そして離れ離れになっても一生忘れられない思い出をつくらう」と励まし合う。是が非でも甲子園で勝たなければならない社会的背景が語られるのである。社会変動の影響が描かれるのは、『ドカベン』の中で唯一といってもいい。

また、いわき東は、明訓や通天閣その他と異なり、校名からして公立高校を連想させ、フォークボールを投げる緒方のワンマンチームである。他の選手は、普通の高校生である。有望選手をかき集めて構成された私立校と異なり、炭鉱の町に暮らす地域の高校生でつくられたチームである。その意味で、東北らしい素朴さを感じさせるチームとなっている。

そして、選手権大会の開会式直前には、「お、おい、緒方、来るぞ。来るぞ。いわきの市民がみんな協力してくれたんだって……。おれたち選手の家族が甲子園へ応援にこれるように資金カンパしてくれたんだって」と、地域の大人たちが地元の高校生を支援してくれたことが知らされる。東北人の相互扶助精神が描かれるのである。

一方、東北の「非合理的」というイメージを色濃く反映させて造型されたのが弁慶高校である。ナインは、ふだん山伏の装束を着用し、開会式の入場行進もその山伏姿であった。とりわけ4番打者の武蔵坊数馬は神秘的な超能力の持ち主として描かれる。武蔵坊は筋肉質の巨漢で、顔の右側には額から頬にかけて刀傷のような裂傷がある異形の相である。岩鬼の母は、岩鬼が2年生の県予

選で優勝した直後、危篤状態に陥る。その母を助けたのが武蔵坊である。武蔵坊は、昏睡する岩鬼の母の身体の上で拳を握り、力をこめる。すると光が射し込み、母は意識を取り戻す。また、江川学院の中の肩をも治す。選手権大会1回戦の土佐丸高校戦では、犬飼武蔵が打った頭上をはるかに越すホームラン性の大飛球を、急失速させて捕球する。不可思議な力を、ここでも発揮するのである。

東北からはもう1校、りんご園農業高校という個性的な学校が登場する。前出の上瀬由美子『ステレオタイプの社会心理学』は、「私たちは、ある地域の人が共通してある特徴をもっていると漠然と信じているフシがあります。その地域（たとえば青森）に住んでいても、その特徴（たとえばりんご農家）に当てはまらない人もいるのですが、それは無視してイメージが形成されているのです」（同書P.2）と、青森県を例にステレオタイプの説明を始めている。まさに、この「青森＝りんご」の表象が横溢しているのが、りんご園農業である。校名からして、すでに「りんご園」である。高校では、りんごの品種改良、育種、収穫などを行っている。

りんご園農業の応援歌は、「リンゴの唄」「リンゴ追分」「リンゴ村から」であり、応援団は自軍の集中打に「見たかアップル魂を」と叫ぶ。主砲の名前は、星王（スターキング）であり、その星王は「王鈴」「紅玉」「旭」「デリシャス」と、りんごの品種を使って里中の投げる球の球種を打者に伝える。里中が「なんてややこしい伝達の方法をするんだ」というのに対し、殿馬は「やっこさんらにとってはよ、なじみのことばづら」と返す。

りんご園農業の生徒は、「ふだんから働きながら野球や勉強をしとる」と、農作業をしながらの高校生活である。しかし、『巨人の星』の左門豊作が色濃くまとっていた「惨めな農村」のイメージは払拭されている。「りんご園農業高校が設立されてからは、その収穫量および品種改良はめざましく、生徒たちによる功績はたいへんなもの」であり、「リンゴの味を生かしたいろいろな加工品の開発」まで行われているとされる。『巨人の星』連載時（1966年～71年）

から10年以上経過して1980年代になって、現代的で前向きな農業と農村の姿が表現されている。

一方、近畿地方のイメージは、今榮の研究によると「中部・中国と近畿が異なる点は、都会的という点と古さがあるという点である。このことは、近畿が大阪に代表される都会的先進的な面と、京都・奈良に代表される古代的な面を共有していることを示すものである」（今榮国晴「地方イメージにおける近畿圏の特徴」P.284）とのことである。

こうしたことは『ドカベン』にもまた反映されており、イメージの明瞭な大阪府と京都府の高校が登場する。大阪府は通天閣高校、京都府は紫義塾が代表校として明訓高校と対戦する。

大阪が想起させるものといえば、なんといっても金銭欲、物欲の強い人間である。実際には、金銭欲、物欲の強い人間は、全国にほぼ一定の比率で存在するのではないかと思われる。その中で、なぜ「大阪人」＝「金銭に執着する人」「カネに汚い連中」というステレオタイプが形成されたのであろうか。井上章一によると、「一九六〇年代までは大阪で話が展開される、大阪制作のドラマも、よく放映された。しかもゴールデンタイムに全国へ流されている。人気をよんだのは、大阪商人の、いわゆるど根性をえがいたドラマである。どんな逆境をむかえても、歯をくいしばって、たちむかう。金銭へのあくなき執念に、つきうごかされる。そんな人物を登場させる商魂もの、根性ものが、大阪ではよくつくられた」（井上章一『大阪的』P.233）ことによる影響が大きいとしている。

通天閣高校のエースで4番は、大阪の棋士である坂田三吉の名前が与えられ、この坂田が金銭に執着する人物として描かれる。まさに大阪人のステレオタイプを体現した人間となっている。坂田は、お鹿という祖母との2人で、長屋で貧乏暮らしをしている。お鹿は「がめつい」女性であり、坂田に対して「どこへ行くにも、何をするにも、野球、野球じゃ。そして野球で銭をかせいで、わしにもわけてもらわんと」という人物である。坂田自身、深紅の優勝旗のまわ

りの金紗を1本1万円で好事家に売ることを考える。

同じように経済的に恵まれない主人公の山田太郎や東北の緒方勉は、金銭欲が強い人間には描かれない。また弁慶高校は、岩手から歩いて甲子園入りする。その理由を問われて、エースの義経光は「金がないから歩いてきたまでのこと」と言う。記者に「寄付金などで、そんなことをせんでも」と返されると、「そんな金など必要ない」と切って捨てる。こうなると同じ貧困でも、こちらは清貧ということになる。宗教系の学校だからということと、いくばくかは貧しくても真っ当に生きる東北農民のイメージが投影されているのかもしれない。

一方、京都といえ、古都、寺社、伝統文化のまちということになる。しかし、これは中高年層や女性が抱く京都像ということになる。少年漫画を読む年代の男子にとっての京都といえ、幕末に新選組が活動した地ということになる。修学旅行生向けの土産物店では、新選組を象ったみやげものが定番商品として売られている。

こうしたことを受けて紫義塾は、新選組⁶⁾の表象によって造型されている。選手は、近藤勇二(近藤勇)、沖田総士(沖田総司)、藤堂兵助(藤堂平助)、永倉新一(永倉新八)、山南敬(山南敬助)、西藤一(斎藤一)、甲子太郎太(伊東甲子太郎)と新選組の局長や隊士の名前が当てられている。そして、「紫義塾」という校名なのに、野球帽につけられた標章は、なぜか「誠」である。紫義塾高校は、高校剣道10連覇の学校である。もはや剣道の大会に出る意味はないということで、もっと学校の人気をあげられる野球で日本一になろうと、剣道部が野球部に衣替えしたという荒唐無稽な設定である。投法、打法は剣術の応用という変則的なもので、話し言葉は時折時代劇調になる。

現実世界では、勝利数でも、勝率でも京都府を上回る兵庫県・和歌山県の高校は、『ドカベン』に登場することはなかった。その背景には、「京都・大阪と住民の性格が、昔からはっきりしたイメージにまとまっているところに比べて、兵庫となるとこんどは、だいぶん事情が異なり、なにが県民性かといってもどうもはっきりしない」(祖父江孝男『県民性』P.176)というような事情

もあったのであろう。

5 地理と気候

対象となる主たる読者層が児童生徒ということで、細かい地理的知識がなくてもわかるように、よく知られている地理的な事項が校名につけられる。鳥取－大砂丘、新潟－信濃川、鹿児島－桜島、大阪－通天閣といったところである。逆に、これらの事項がそれぞれの府県の象徴だと、一般に受け取られているとあってよいだろう。

山田太郎3年春の選抜は、気象条件に苦しめられる。準決勝の沖縄県・石垣島高校との試合は、春なのに異常な暑さに見舞われる。石垣島の選手にとってはいつもの気候である。明訓ナインは暑さに体力を奪われ、思ってもみない苦戦となった。石垣島高校のエースは、具志拳である。「具志拳(堅)」といえば、沖縄出身で『ドカベン』連載時にWBA世界ジュニアフライ級チャンピオンとしてタイトルを13回連続防衛した具志堅用高からの借用である。わざわざ「拳」としているところからも、それがうかがわれる。石垣島高校は練習に器械体操を取り入れているので、ロサンゼルスオリンピック体操男子個人総合金メダルの具志堅幸司(大阪府出身)のイメージも加わっているのだろう。

また、山田にサヨナラホームランを打たれた具志拳は打ちひしがれながら、「う、うそだ。このやろうが一億円なんて、うそだ。おれたちは千円の金すら作るのに大変なんだ…。そ、それなのにこいつは…」と内言で語る。ここには、都道府県別でみた所得水準が最も低く、失業率も高い沖縄が暗に示されているとあってよいだろう。

翌日の決勝の相手は、北海道の北海大三高である。昨日とはうってかわって大寒波到来で、北海大三高にとっては「寒波と雪の中で鍛えてきたわしらには、これ以上のナイスコンディションはねえぜ」ということになり、あまりの寒さに体が動かない明訓は準決勝に続いて大苦戦となった。

『ドカベン』の最終盤、3年春の選抜大会準決勝、決勝で常勝明訓を苦しめ

たのは、対戦校の個性や作戦、あるいは超高校級選手の存在ではなく、気象条件という拍子抜けする話の展開であった。また、石垣島高校との準決勝は春先なのに猛烈な暑さで、翌日の北海大三高戦との決勝の日には異常寒波で4月なのに甲子園に雪が降る、というご都合主義であった。それにしても北海大三高は、前日の猛暑の準決勝をどうやって勝ち抜いたのであろうか。この安易さゆえに、気候的に対極の地域特性をもつ、北海道と沖縄の高校が登場することになった。

6 四国はどう表象されているか

6.1 四国＝高知

明訓高校の最強の対戦校といえば、衆目の一致するところ土佐丸高校であろう。神奈川県外の高校では、明訓高校と三度の対戦があるのは土佐丸高校のみである。実際、四国は高校野球が強い地域である。高知県が春夏の甲子園通算勝利数で9位・勝率3位、愛媛県が勝利数で10位・勝率5位、徳島県が勝利数で16位・勝率8位、香川県が勝利数で17位・勝率18位である。香川県は、1970年代に名門高松商業が夏の甲子園で「出ると負け」状態に陥り、21世紀に入ってからはその高松商業が2016年春選抜で準優勝して復活するまで県全体として低迷期を経験したので、やや数字が悪い。他の3県は、勝率でみると10位以内に入っている。これは、近畿地区が大阪府・兵庫県・和歌山県と3県入っているのに並ぶ。近畿地区は6県で3校、四国は4県で3校だから、率にしたら最も良いともいえる。四国4県は人口的には小県ばかりにもかかわらず、高校野球の世界ですばらしい成績を残している。まさに高校野球王国である。

以上のようなことから、明訓高校の最強の敵が四国に置かれるのも当然のことと言えよう。しかし、『ドカベン』では必ずしも現実の高校野球の県別勢力図が反映されているわけではないということは、これまで述べてきたとおりである。それよりも地域の個性が際立っているところが登場しがちなのである。では、なぜ四国なのであろうか。

今栄の学生対象のイメージ調査によれば、四国は「温度も、九州に次いで暑いと考えられているようである。都会性に関しては相当田舎くさいと感じられており、最大の特徴は、非常に小さいと考えられている点である」（今栄国晴「地方イメージにおける近畿圏の特徴」P.284）とある。東北と並んで「相当田舎くさい」地域であることが、都会的な明訓高校との対比上、ふさわしい地域であったというのが1つあるだろう。

その「田舎くさい」四国の中で、いかなる理由から高知が選ばれたのであろうか。「田舎くさい」という点では、四国4県どこも引けを取らない。また、既述のとおり現実の高校野球の成績も4県とも良好である。そうしたことからいえば、明訓を脅かす強敵が、愛媛県にあっても、徳島県にあってもよかつたはずである。しかし、これは高知県でなくてはならなかったのである。

今栄国晴の調査では、各地方を評定するに際して、各地方のどの部分を手がかりに評定したかを尋ねている。四国は「高知という反応が圧倒的に多い。四国とは多くの学生にとって南国土佐であり、他の3県はイメージにのぼらないのであろう」（今栄国晴「地方イメージにおける近畿圏の特徴」P.289）とある。また、同じ今栄によって、愛知教育大の学生274名を対象に、1968年3月に各地方の連想語を尋ねる調査が行われている。この調査でも同様の結果が出ており、「四国は、高知が圧倒的なことは、表4-3-6と同じで、次いで高松、徳島が入っている。四国とはすなわち高知であるといえるだろう」（同上P.294）と結論づけられている⁷⁾。

愛知教育大での調査では、他の地方は、北海道-札幌、東北-仙台、関東-東京、中部-名古屋、近畿-大阪、中国-広島、九州-福岡と、その地方で最も人口が多い中心都市が、最も多く連想されている。四国だけは、国の出先機関や圏域企業（電力やJR）の本社が集中している四国の中心都市・高松でもなければ、四国最大の人口規模の松山でもない。高知なのである。

なぜ四国といえば高知なのであろうか。祖父江孝男は、「高知というと長州と並んで、とかく話題の多いところ」（祖父江孝男『県民性』P.194）と述べ

る。高知は、「いごっそう」「はちきん」「坂本龍馬」「酒豪」「よさこい」「闘犬」と、明瞭なイメージを有することでは47都道府県の中でも有数だといえる。それゆえ、一般の人が「四国」と聞いたら「高知」を思い浮かべるのである。このため、明訓高校の好敵手は、高知の土佐丸高校でなければならなかったのである。

6.2 野蠻で不気味な四国

高知の土佐丸高校の中心選手は、犬飼小次郎・武蔵の兄弟である。そして代名詞は、「殺人野球」である。兄の犬飼小次郎は、均整のとれた体つきで整った顔立ちをしている。しかし、西部劇の悪役のようなもみあげをたくわえている。山田は初めて犬飼小次郎を見て「なんと妖気ただよう男なんだ」との感を抱く。小次郎は、土佐犬の嵐を連れ歩いている点でもふつうではない。土佐丸高校は、甲子園出場を決めた後に行方不明になったり、大会前の選手に土佐犬の牙と爪をかいぐってすべり込みをするという通過儀礼を課したりする。開会式に向かう時に小次郎が発する言葉は、「よーし、出かけるぜ。血の海甲子園球場へ」である。小次郎にとって高校野球は、「命を賭けた血で血を洗う死闘」なのである。このあたりには、坂本龍馬ら土佐藩の勤王の志士のイメージが投影されているのかもしれない。投手としての小次郎は、「キャッチボール投法」という異様な投球動作で勝ち上がっていく。土佐丸はすべてにおいて、不可思議で、薄気味悪く、禍々しく、好戦的な異形のチームとして描かれる。

土佐丸は、夏の甲子園大会準決勝戦を明訓と戦う。その試合では、塁上の交錯プレーや本塁突入などで、守備の選手を傷つけるかのような乱暴な走塁をする。あるいは、打者のバットが守備の選手めがけて飛んだり、走塁中の対戦チームの選手の体めがけて送球が投じられたり、と危険な行為が続出する。大会役員は、「土佐丸高校はあぶないプレーがつづくのォ」「このままなにごともなく終わってくれたらいいのやが…」とこぼす。これが、土佐丸の「殺人野球」である。土佐犬の凶暴さが、土佐丸の「殺人野球」に重ね合わせられている。

小次郎が卒業してからは、弟の犬飼武蔵が土佐丸の中心選手になる。武蔵は、身長が高く、横幅もある巨漢選手として描かれる。大型選手の岩鬼よりも、さらに二まわりぐらい大きい。さらに異彩を放つのが、山田太郎2年の春選抜大会から登場する犬神了である。犬神は隻眼の小柄な左腕投手で、「ウイヒヒヒ」「キヒヨヒヨヒヨ」など、不気味な笑い声や奇声をあげながら試合をする。武蔵の救援にマウンドに立つと、テレビのアナウンサーは「なんと、しかし異様なムードのただよう少年でしょう」と語り、「この時、山田の耳に、犬神のその笑いは地獄の底からきこえてくる思いがした。その笑いは、山田がはじめて感じる背すじも凍るような戦慄であった」と、山田太郎を怯ませる。そして、犬神が投球すると左腕が伸び縮みするという奇怪な現象が生じ、山田を幻惑させる。山田との三度目の対決では、故意に死球を投じる。しかも、当たった時はさして痛くなくても、次第に痛みが強くなるという魔球で、自称「死神ボール」である。

この犬神了の性格づけには、四国が犬神憑き現象の発生地であることを反映させられている。不気味さ、恐怖の源となっている要素でもある。石塚尊俊は、憑き物について「家筋というものを真剣に考え、(中略)そういう家とは絶対に縁組をしないとっている所がある」とし、「そのもっとも甚だしいのは島根・高知・大分県の一部である」(石塚尊俊『日本の憑きもの』P.11)と指摘している。憑き物の中でも犬神に関しては、「概して東日本はクダ・オサキ・イヅナの地盤であり、また西日本でも、山陰はトウビヨウ狐や人狐、西日本はヤコ、瀬戸内はヘビのトウビヨウの繁栄地であるから、犬神としてはやはり四国をもって本拠とすべきであろう」(同上P.58)と、犬神を四国のものとしている。

四国の犬神が重要な役割を果たす作品を思い浮かべてみると、他にもある。医学ミステリー漫画の名作とされる手塚治虫の『きりひと讃歌』である。『きりひと讃歌』は、奇病・モンモウ病の謎をめぐる話が展開していく。その奇病が多発している地域が「徳島県犬神沢村」である。主人公の小山内桐人は、

恋人にモンモウ病を以下のように説明する。「四国のある地方には犬神の伝説とか阿波ダヌキの伝説とかがあろう？ その伝説のもとになっているといわれるのが、あの奇病なんだ。ある地方の山あいの村だけに起こる病気でね。突然からだのあちこちが麻痺して骨の形がかわってくる…。顔はとがり、背骨はまがり、手足の骨は委縮して、立って歩けなくなる！ ひとめ見ると…、それは…、人間というより……、犬かタヌキのようなあわれな姿になってしまうんだ……」というものである。

『きりひと讃歌』の序盤、「袋小路」の章から「陥没」の章までは、四国の山奥の閉鎖的な村が、不気味な雰囲気でも描写される。小山内は、この犬神沢村へM大医学部附属病院からモンモウ病の資料集めに派遣される。村での1日目の夜に、小山内が借りた家へ村の若い女がやってきて、いきなり服を脱いで裸になる。小山内は「そうか…ある地方じゃ、客に生娘をご馳走がわりにさし出すと聞いていたが」と得心する。古い土俗的な風習が残っている村なのだ。そして小山内は、村人から監視を受け、村の外に出ようとするや殺されかける。ついには、自身がモンモウ病に罹患してしまうのである。

小説では高知県出身の坂東真砂子が、高知県を舞台にその名も『死国』『狗神』といった恐怖小説を著している。『死国』は「矢狗村」で話が展開していく。その中に現れる架空の研究書『四国の古代文化』の叙述として、「死者の住む国とは、平明に言えば黄泉の国である。この黄泉の国は、黄泉津大神の治める黄泉津国である。ヨモツクニは、四方つ国。この言葉の最初の文字と最後の文字を取ると、四国となる。これらのことから、見えてくるものは自明である。つまり四国は古来、死者の国、死霊の住まう島であったのだ」（『死国』角川文庫P.60～61）という見解が示される。

このように四国は、野蛮な地であり、不気味な地として表象されているのである。そして、こうした要素を活かして、犬神了や土佐丸高校が強く印象に残るような造型がなされたのである。

6.3 四国は1つ、あるいは識別不能な地域

「アジアは1つ」「九州は1つ」という言い方がある。それに対して、四国の行政関係者からしばしば発せられるのは、「四国は1つ1つ」という言葉である。これは、四国4県がまとまっておらず、一体となって何かを進めていこうという意識が薄いということを説明するときに口に出る文言である。祖父江孝男は、「四国人、四国男子といった言葉はないが、九州人、九州男子という言葉はよく使われる」（『県民性の人間学』P.258）と述べ、「四国はひとつの大きな島だが、あくまで四国である。四つの国（県）がそれぞれ個性豊かにその存在を主張している。県同士のつながりはあまりなく、むしろバラバラに四国以外の他府県と結びついている」（『県民性の人間学』P.232）と、やはり同じような認識を示している。しかし、この祖父江の認識は、日本の各地域を知悉しているインテリのものである。一般の人からすれば、やはり「四国は1つ」なのである。

一般には、四国が一体化されて認知され、4県を区別して認識できていないことを示す例が『ドカベン』中に存在する。土佐丸の犬飼小次郎の仇名は「鳴門の牙」である。謎の選手として初めて登場した場面では、背景に渦潮が描かれている。作者の水島新司本人はもとより、これをみた高学歴であるはずの編集者はおかしいとは思わなかったのであろうか。それとも、知っていてあえてそのような名称を与えたのであろうか。いうまでもなく、「鳴門」は徳島県にある地名である。高知県の超高校級選手の仇名としては、あきらかにおかしい。岩礁に打ちつける荒波を背景に「室戸の牙」とでもされた方が、高知県人にはしっくりくるはずである。もっとも、かく言う筆者も少年時代に読んだときには、特に違和感を覚えなかったので、やはり四国4県を一体のものとして捉えていたといえる。

また、3年生春の選抜大会で本塁打を放った犬飼武蔵は、「打った犬飼くんをごらんください。あの冷静な犬飼くんが、踊りながらのダイヤモンド一周です。あっ、あの踊りは地元四国の名物阿波踊りです。これはしかし、地元の観

光協会が大よろこびしそうな心にくい宣伝であります」という拳に出る。『ドカベン』に関して詳細の分析を試みた豊福きこうは、さすがにおかしいと気づいていて、「なぜか徳島名物の阿波踊りを踊りながらダイヤモンドを回った犬飼武蔵」（豊福きこう『ドカベン、打率7割5分の苦闘』P.64）と記している⁸⁾。高知ならば「よさこい」である。ここでも四国が一緒くたにされている。

四国と言ったら、高知が想起されることを指摘した。その上で、四国は混然と一体化されて認知されており、島外の人たちにとっては4県を個別に認識するのが困難なのである。辺境の島なるがゆえの哀しさである。

7 結論～野蛮で不気味な田舎＝四国～

漫画『ドカベン』は、高校野球の世界を真に迫るように描こうとする作品ではない。強烈な個性をもった主人公たちの属するチームが、手ごわい相手チームとの苦戦、接戦を乗り越えて勝ち進んでいく姿を描くものである。であるから、対戦相手の中には高校野球チームとしてはありえないような荒唐無稽の設定のチームも登場する。あくまで、話の展開の面白さを優先させている。全国大会となると、対戦相手は日本各地に散らばることになる。その際、強いイメージや明瞭なステレオタイプをもっている地域が対戦チームの立地している都道府県として選ばれる傾向が強くなる。すなわち、東北、近畿、四国である。

この中で、強い「田舎」イメージをもっていることで共通しているのは、東北と四国である。しかし、同じ「田舎」でもチームの性格づけに使われる「田舎」要素は、東北と四国ではまったく異なっている。

東北の代表校には、相互扶助、清貧、団結、勤労、癒し、素朴と、総じて田舎のいいイメージが与えられている。非合理性、神秘性も、弁慶高校の武蔵坊数馬を通して肯定的に描かれる。

一方、田舎の負の側面を体現しているのが四国である。野蛮、凶暴、怪しげ、禍々しい、邪悪、こうしたものが四国の表象である。獯猛な土佐犬や不気味な犬神伝説は、こうしたイメージを表現するまたとない材料となって、チームや

所属選手の造型に利用されている。

四国は、出版文化の中心地・東京と距離的に遠く、島であるため地理的に隔絶されていて、なじみの薄い未知の地域である。また四国は領域的に狭く、九州の福岡や北海道の札幌のように、誰もが知っている大都市を島内にもっているわけでもないで、ますます未知の領域と化す。四国がよく知られていない地域というのは、犬飼兄弟の事例からもあきらかである。4県が個別に明確に認知されていないのである。

未知なるものは不気味さを帯びる。断片的に伝わる四国の情報は、勤王の志士、土佐犬、犬神憑き、四国霊場八十八箇所と、荒々しく、怪しげなものである。こうしたことが、東北とは対極的な、野蛮で不気味な田舎＝四国という表象の形成につながったと思われる。

注

- 1) 調査の対象となったのは、京都薬科大学・山梨大学・金沢大学・山口大学・愛知教育大学の1・2年生で、合計471名。調査期間は1965年10月～12月。愛教大のみ1968年6月。
- 2) サイボーグ戦士は9人。サイボーグ研究者のギルモア博士を入れて10人。
- 3) その後、登場人物たちがプロ野球で活躍する姿を描くプロ野球編も描かれる。ここでは、高校野球を舞台にした作品のみを取り上げる。
- 4) 『ドカベン』連載中の1970年代後半から1980年代前半にかけて、埼玉県では上尾高校が野本喜一郎監督の下、甲子園出場の常連校だった。「下尾」は、この「上尾」のもじりである。
- 5) 緒方勉がステレオタイプ的な東北弁を話すのは、この出稼ぎ場面だけである。以降は、標準語を話す。緒方の母に至っては、かなり上品な標準語を操っている。理由はさだかではないけれども、明訓の前に立ちただかる天才投手が田舎っぽい東北弁を話している様にならないと、作者が考えを改めたのかもしれない。ちなみに高知の犬飼小次郎・武蔵兄弟も、「○○ばあ」「○○ちゅうが」「○○やき」というような土佐弁は使わず、標準語で話している。犬神了のみ、「○○だっちゃ」という語尾をもつ正体不明の言葉を話している。
- 6) 『大甲子園』の中では「新撰組」という表記になっている。
- 7) 論文中には、高知147、高松42、徳島26、松山17、琴平5、無答11との数値が明記されている。

- 8) 豊福きこう『ドカベン、打率7割5分の苦闘』には、「サヨナラ本塁打の犬飼武蔵はなぜ阿波踊りを踊ったのか?」という一考察が収録されている (P. 117~120)。

参 考 文 献

- 石塚尊俊, 1972, 『日本の憑きもの』 未来社
 井上章一, 2018, 『大阪的』 幻冬舎
 今柴国晴, 1969, 「地方イメージにおける近畿圏の特徴」 京都大学近畿圏総合研究会編『近畿圏 その人文・社会科学研究』 鹿島出版会
 金水敏編, 2007, 『役割語研究の地平』 くろしお出版
 金水敏, 2014, 『コレモ日本語アルカ?』 岩波書店
 上瀬由美子, 2002, 『ステレオタイプの社会心理学』 サイエンス社
 きたがわ翔, 2021, 『プロが語る胸アツ「神」漫画』 集英社
 祖父江孝男, 1971, 『県民性－文化人類学的考察－』 中央公論社
 祖父江孝男, 2012, 『県民性の人間学』 筑摩書房 (ちくま文庫)
 豊福きこう, 1999, 『ドカベン、打率7割5分の苦闘』 ネスコ
 夏目房之介, 1991, 『消えた魔球』 双葉社
 吉田禎吾, 1972, 『日本の憑きもの－社会人類学的考察－』 中央公論社
 米沢嘉博, 2002, 『戦後野球マンガ史』 平凡社

マンガ・小説

- 石森章太郎『サイボーグ009』 秋田書店
 梶原一騎・川崎のぼる『巨人の星』 講談社
 手塚治虫『きりひと讃歌』 小学館
 坂東真砂子『死国』 角川文庫
 坂東真砂子『狗神』 角川文庫
 水島新司『ドカベン』 秋田書店
 水島新司『大甲子園』 秋田書店